地域に支え合いの場をつくろう

第二の家「かつら」

宅幼老所「かつら」は、かつての葛島分校・保育園跡地にあります。子ども時代を過ごした思い出いっぱいの地で、幸せな老後を過ごしてもらおうと、NPO法人かつらが設立し運営しています。

「ここのめざすものは『第二の家』です。住みなれた地域で最期まで暮らしたいという願いに、精一杯応えようと設立しました」と、同法人理事長の伊佐栄豊さん（葛北）は話します。第二の家は働く職員もまた家族。「血の通った福祉とは、携わる一人ひとりの意識の問題。常々、利用者の立場と気持ちに即した慈しみの心を養っている」と、同じ目線からの共助の精神を口にします。

かつらの特徴のひとつは、利用者だけでなく介護者も便利に安心して利用できる点です。スタッフのひとりは、「誰も自分の家が一番。その家で生活するためには、安心して通ったり泊まったりできる便利なサポート基地が必要です。私たちがそのお手伝いをできれば」といいます。かつらでは通所せず家にいるときも、お弁当の配達や訪問介護などを行い、一人のお年寄りをいつでも支えられる態勢をとっています。

今後は地域の人との交流を大切に、多くの人が立ち寄り、かつての学校のような歓声が響き渡る場にしたいといいます。

宅幼老所かつら

お年寄りの元気を活かして

高齢化が進む一方で、元気な高齢者が果たす役割も今後は高まってくると考えられます。

長野県は全国トップクラスの長寿県です。その理由はさまざまですが、ひとつに、地域への強い愛着と責任をもち、生涯現役で働こうとする気質が挙げられます。村の高齢化率は28％に迫ろうとしていますが、地域社会への参加意欲に満ちた、元気で健康なお年寄りが多いのも事実です。このような意欲を積極的に活かす道筋をつけることが、お年寄りの生きがいにつながると考えられます。

村内には健康で元気なお年寄りもいっぱい。その意欲を村づくりに活かし、生きがいにつなげたい

協働の村づくりへ

自立に向けて支え合うこと

中川村には、お互いに助け合ったり支え合ったりする「結」の共同体質が古くよりあります。近年は福祉や子育て、環境といった共通テーマのもとに人が集いつくられる共同体も増えてきました。さらに住民の力を地域づくりに活かす手法として、住民と行政のパートナーシップによる協働の村づくりが注目されています。

人はコミュニティ（共同体）の中で、人に依存し、互いを支え合い、協働して生きています。支え合いの度合いが高まれば、そこに豊かな人間関係が築かれます。

近年、地域の自立度向上の必要性が叫ばれていますが、本来100％の自立というのはあり得ません。人も地域も誰かに、何かに依存し合って生きています。この、つながり依存できる人やものが多ければ、その時点で選択の幅が広がり、自立度は向上するものと考えられます。つまり、支え合い依存し合う度合いが高いほど、自立度も高くなれると思うのです。大切なのは、お互いが依存し合い、お互いを支え合っていける社会の体質づくりではないでしょうか。

道づくり、山作業、河川清掃など、公共の場では「結」の精神に根ざした協働作業が行われている